

## 受難の主日 (ルカ 23:1-49)

御父は和解の道のりを見守っておられる



四旬節中、ミサの奉献文に「ゆるしの奉献文(二)」を使うようにしてきました。この奉献文には「人類の和解」という明確なテーマがあります。この奉献文中で中田神父が第一に祈ってきたことは、ウクライナとロシアの人々の和解です。敵対することをやめて、和解できるように、和解のその時まで、私はこの奉献文を使い続けようと思っています。

「ゆるしの奉献文」の中に「キリストこそ救いのみことば、罪人に差し伸べられる手、まことの一致への道です」という祈りがあります。和解のためには敵対する両者が手を取り合わなければなりません。両者の手を握らせるのが、まことの一致への道であるキリストなのです。

和解のためには、敵対する両者が歩み寄らなければなりません。今日の受難の朗読の中でも、指導的立場にある人、群衆、イエスを信じる人々、すべてがイエスに引き寄せられています。イエスこそ、まことの一致への道です。どのような形であれ、イエスに近づき、歩み寄らなければ、一致点は見いだせないのです。

本日朗読された「ルカによる主イエス・キリストの受難」は、御父の側から和解の道を見守っておられると感じます。「和解のいけにえ」として差し出されたイエスの姿を、私たちは朗読を通して辿ってきたのです。イエスは「和解

のいけにえ」なので、ご自分を弁護しません。

ちなみに、聖金曜日の「ヨハネによる主イエス・キリストの受難」は、御子イエス・キリストのほうから和解のために手を差し伸べる描き方です。イエスから語りかけられるたびに、兵士と千人隊長、大祭司、総督、ユダヤ人たちが和解の席に着き、導かれていくのです。

もちろん、完全に導かれ、過ちを認めるものではありません。それでもイエスは和解のために最後まで力を尽くされ、人間の努力で足りない部分は、ご自身の命によってあがなってくださいました。ロシアの戦争行為も、人間の反省だけでは和解にたどり着けません。人間の努力で足りない部分を、今もイエスはご自分の命であがなってくださるのです。

本日受難の主日は、聖木曜日、聖金曜日の典礼に参加できない人のための典礼でもあります。イエスこそ、自分たちの言い分を一步も引かずに歩み寄れない人たちの一致への道です。イエスこそ、過ちを認めることのできない弱い人間を和解させる救いの手です。イエスの力により頼みましょう。

和解は、目に見える形では敵対する人が近づき、手を取り合うことで実現しますが、見えない部分ではイエスの力がなければ実現しません。この一週間、御復活の日まで「救いのみことば、罪人に差し伸べられる手、まことの一致への道」であるイエスに祈り続けましょう。和解の席に、人類すべてが座ることができますように。

## 聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

互いに足を洗い合い、イエスの食卓に着く



聖木曜日、イエスはイスカリオテのユダにも和解への道を示そうとされました。「皆が清いわけではない」と明言されても、足を洗ってくださり、誰も取り残されないように心を砕かれたのです。

イエスは「先生と弟子」の関係を越えて、和解のために僕の仕事を引き受けました。模範を示して、イエスが再び食事の席に着かれたことに目を留めましょう。これは過越の食事ですが、先生ができるのだから、弟子がそれをできないはずがない。そのことを確かめる席に着いたという意味もあるでしょう。身を低くすれば、できない和解はないのです。

この晩さんの席に着いた十二人の弟子たちは、心ではさまざまな思いが渦巻いていました。イエスが王座に着いたら右と左に座りたいと考える弟子がいました。財布を預かっていて中身をごまかしている弟子もいました。だれがいちばん偉いだろうかと議論したりもしていました。

ペトロはその中で最も素朴な弟子だったかも知れませんが、「あなたのためなら命を捨てます」と言えました。実際そうなる運命でしたが、もちろん自分の力ではありません。いよいよの場面ではイエスを「知らない」と三度否認します。それでも、ペトロの正直さは特別でした。

ペトロはイエスから足を洗ってもらうとき、

「主よ、足だけでなく、手も頭も」と求めました。何かを表しているのではないのでしょうか。「手」は人間の働きを、「頭」は人間の考えを、それぞれ表しているのではないのでしょうか。働きのすべて、考えのすべてをイエスに清めてもらおう。食卓に着く準備、一つのテーブルに着く準備がここに示されているのだと思います。

イエスの食卓に、名誉を求めている人、財布の中身をごまかす人、どこまでも素朴な人、さまざまな人が食卓に着きました。イエスが用意してくださる食卓には、どんな人でも席に着くことができます。ただ、食卓に着くすべての人が、互いに相手よりも低くなる、互いに仕え合う、その準備が必要です。

今日ここに集まった私たちすべてが、イエスの食卓に着くことができます。準備として、互いに相手よりも低くなることを引き受ける覚悟があるのでしょうか。「あの人よりはマシだ」と考える人がいないのでしょうか。その人の足を洗う、その人に仕える覚悟があるのでしょうか。

こうしている今も、ウクライナとロシアは停戦交渉をしていることでしょう。イエスがおられるテーブルで一つになって、交渉をまとめてほしいと切に願います。イエスがおられるテーブルであれば、どんな事情があっても席について話し合えると信じます。聖木曜日、主の晩さんの食卓を囲みながら、世界中の人々が一日も早く平穏な日々を取り戻せるよう、心を合わせて祈りましょう。

## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

和解のためにイエスは十字架を取られた



聖木曜日、イエスはイスカリオテのユダにも、和解への道を示そうとされました。聖金曜日、ご自身を犠牲にして、罪の責任を負わなくて済む方法を探っていた残酷な宗教指導者たちにも和解の道を残してくださいました。

十字架上の死をもってしても指導者たちは和解に応じなかったのですが、唯一「イスラエルの教師」とイエスから呼ばれたニコデモは、アリマタヤ出身のヨセフとともにイエスの遺体をユダヤ人の習慣に従って埋葬してくれました。ニコデモはイエスのうちに光を見だし、初めてイエスを訪ねたときから光に照らされて生きていたのです。

さて「ヨハネによる主イエス・キリストの受難」の朗読全体を見渡したとき、「働きかけるイエスの姿」が受難の主日の朗読よりも強調されているのに気づきます。兵士たちと下役がイエスを捕らえようと近づいてきたとき、イエスは声をかけました。「だれを捜しているのか。」

イエスを兵士たち下役たちから守ろうと大祭司の手下に打ってかかったペトロにも声をかけました。大祭司カイアファのぶしつけな質問にもていねいに答弁します。ピラトにも、問いかけの何倍もの返事をしています。

裁判が終わって十字架のもとでも、母マリア、愛する弟子に声をかけます。これらはすべて、和解のための働きかけとなったのです。イエスをあからさまに拒む人にも、怖くてイエスの弟

子であることを公にできない人にも、泣きながらイエスに従う人にも、和解のためにイエスの働きが必要です。ご自分の人としての最後の時間をすべて使って、和解の手を差し伸べてくださったのです。

「和解の手を差し伸べるイエス」は、最後に十字架にはりつけにされました。実際にそうだったかは別として、手のひらに釘を打たれた姿は、「和解の手」「差し伸べられた手」が、今も私たちのために開かれているからでしょう。

この釘打たれ、開かれたままの手を見て、ここに集まった私たちは何を考えるのでしょうか。中田神父は、「差し伸べた私の手を取り、和解に応じて欲しい」と願っているように思えます。血まみれになって和解の手を差し伸べてくださる主に比べると、自分はなぜ血まみれになろうとしないのか。恥ずかしくなります。

「恥も外聞も捨てて」という言い方がありません。イエスが十字架の上で示す姿そのままです。私たちはいつになったら、信仰のためならイエスと同じ姿になっても構わないと考えるのでしょうか。信仰によって招かれた生き方に、いつになったら命をかけ、血まみれになる覚悟ができるのでしょうか。

私たちはすべてを与えられた者なのに、すべてを与えてくださった方にすべてを委ねることができないあわれな身分です。それでも十字架上のイエスは、今も手を開いて、私たちに和解の手を差し伸べておられます。開かれたイエスの手を取るか否かは、私たちに委ねられています。

## 復活徹夜祭 (ルカ 24:1-12)

開かれた手を受け入れ、和解のために働こう



主の御復活おめでとうございます。毎年同じ事の繰り返しですが、復活徹夜祭の説教は、聖金曜日説教準備の後30分も経たずに取りかかっています。人間的なことを言うと、さっきまで「十字架の手は開かれていますよ、あなたはこれを見てどう答えますか」と考えていたのに、切り替えが早いなあという思いはあります。

そしてこうも思います。復活徹夜祭の福音朗読は、A年こそ復活したイエスが現れますが、B年C年の朗読では「天使の出現」と「空の墓」で延々、復活おめでとうございますと説教するのです。どうにかならないものかなあと思います。皆さんに言ってもしかたのないことですが。

しかし空の墓でも、香料を持って出かけた婦人たちを動かすに十分でした。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。」輝く衣を着た人は、イエスは復活なさったと証言し、婦人たちを次の行動に駆り立てたのです。

それでも、婦人たちに勇気を与えている力はどこから来るのでしょうか。もちろん復活したイエスが与えてくださっているでしょうが、何か見える「しるし」があるのでしょうか。

やはり私は、金曜日の出来事をイエスとともに辿ってきた。そのことが婦人たちを行動に駆り立てているのだと思います。

婦人たちは選ばれた弟子たちよりも近くでイエスの最期を見届けました。開かれた和解の手、血まみれの手を取り、イエスによる和解に加わりました。和解のために手を開いて十字架の上で命をささげ、復活し、イエスはその手を取った人と今ここでともにいて、次の行動へと駆り立てているのです。

婦人たちの次に和解のために差し伸べられた手を取り、呼びかけに応じる相手は弟子たちです。そのため婦人たちは復活したイエスに送り出され、弟子たちのもとに急ぎました。

出来事を告げられたペトロは墓へ行き、何をなすべきかを考えます。ペトロは私たちすべての象徴です。何をすることも力が足りない私たちが、イエスのために何かお手伝いするにはどうすれば良いのか。考える必要があります。

それは、何はともあれ空の墓を訪ねて、その後復活したイエスに和解の手を差し伸べてもらい、その手を取ることで、和解のために差し出された手は、まだ釘跡の生々しい手かも知れませんが、その手に釘を押し当てたのは私の罪だったかも知れません。

そうと分かっているとしても、私たちは復活したイエスの手を取らなければ、イエスの弟子でなくなってしまう。私たちがその手に釘を押し付けたのに、それでも復活の主は私たちに手を差し伸べてくださいます。私たちはそのいつくしみによって、死んだも同然の状態から造り変えられ、復活の証人としてもらえるのです。

## 復活の主日(日中)(ヨハネ 20:1-9)

あなたは復活の証人に造り変えられた



あらためて主の御復活おめでとうございます。この説教もまた、さっきまで徹夜祭の説教を書いていて、その後に準備したものです。よくまあ頭が切り替わるものだと感心します。

復活の主日日中のミサで朗読される箇所はヨハネ福音書 20 章です。典礼暦が A B C 年あるのにほかの選択肢はありません。「空の墓」がさらに強調されています。そして弟子たちは、復活徹夜祭の説教で触れたように、何はともあれ「空の墓」を訪ねることから始めます。

今年の聖週間説教は、テーマを決めて準備にかかりました。それは「イエス・キリストによる人類の和解」です。多少テーマに合わせようと無理をしたかも知れませんが、それでもあえて、「和解」をもたらす方は「仲介者イエス」を置いてほかにないことを確認したかったからです。

ウクライナの凄惨な映像の中で、教会が映っていました。テレビに映っていた教会の中でも「イエス・キリストによる和解」を祈り続けていたと思います。今年の聖週間は、ロシアのウクライナへの侵攻が終わって、両国が和解できるように皆さんと一緒に祈りたかったのです。

そしてこの聖週間の締めくくりとなる日中のミサの中で、空の墓を訪ねたペトロともう一人の弟子とともに、復活の証人に造り変えられたいのです。どんな人にも和解の手を差し伸べ

るイエスを捜し求めたが墓は空だった。それでもイエスは和解のために手を差し伸べてくださるはず。それはどこでどのように行われるのか。

イエスが愛しておられたもう一人の弟子は気づきました。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」と。和解を必要としているすべての人は、これからは墓に納められたイエスではなく、復活してくださったイエスと和解させてもらおうのだということです。

この後弟子たちはガリラヤへ行くように言われます。ガリラヤはイエスと弟子たちが宣教活動を繰り広げた場所です。今回ガリラヤは復活したイエスと和解するための場所となります。復活節第二主日の朗読では「あなたがたに平和があるように」とイエスが招いています。

復活したイエスから和解の手を差し伸べられて、人は断ることができるようでしょうか？ 私たちはその手を黙って握り、新たな気持ちでイエスについていく。できることはこれだけです。

私たちの至らなさを十字架にはりつけ、復活して私たちにゆるしの恵みで覆って証し人に造り変えてくださる。「忙しくてイエスを人に伝える暇が無い」と、本当に言えるでしょうか。

復活したイエスは、私たちが生活の中心にしている場所、「私たちのガリラヤ」で待っておられ、和解の手を差し伸べてくださいます。あなたはその手を、暇を見て握るのでしょうか。真っ先に手を取り、生活の中心にお迎えするのでしょうか。あなたが本当にイエスを信じているかが、今問われているのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:1-9)